

早稲田大学大学院理工学研究科

# 博 士 論 文 概 要

## 論 文 題 目

イタリア北部を中心とした 1920 年代後半から 30 年代の  
イタリア合理主義の建築思潮に関する研究

Architectural thought of Italian Rationalism in Northern Italy  
from the late 1920s to the 1930s

申 請 者

北川 佳子

Keiko Kitagawa

建設工学 建築計画

2002 年 12 月



1920年代後半から40年代前半のイタリアにおける近代建築運動の代表的なものに、「イタリア合理主義」と呼ばれる運動がある。本論文は、この運動の中の、20年代の初期合理主義及び30年代のイタリア北部の合理主義の建築思潮に関する研究である。イタリア合理主義は、1926年から27年にかけて発表されたグループ7による4編の論文がその発端とみなされる。その後、この運動は、28年の第一回合理主義建築展の開催、続くMIAR(イタリア合理主義建築運動)の結成によって運動の全国的拡大が図られ、31年の第二回合理主義建築展の開催に際して、この展覧会の事実上の主催者であるP.M.バルディによって国家の建築への介入が要請される。しかし、MIARはこの展覧会后、保守派の圧力によって解散することになる。そしてその時期から、各都市のイタリア合理主義のグループは、建築設計の他、展覧会、設計競技、さらに建築専門誌或いは非専門誌上での建築論争によって運動を展開させるが、30年代半ばより伝統主義者の勢力に押され、さらに戦局の悪化によって、この運動は衰退する。

イタリアにおける合理主義運動は、他のヨーロッパ諸国の合理主義運動とは異なり、その運動の概念が明確でないことを、既に当時において著述家のE.ペルシコは指摘していた。また、グループ7は、その発端とされる論文でイタリアの伝統を継承する合理主義を主張するが、その後、合理主義者はその運動に関して、「ローマ性」、「地中海性」、「協調体の建築」等のスローガンを展開する。ところでこの運動は、ファシズムという政治体制、さらに当時の文化、芸術運動と関わりをもち、また各都市の合理主義の運動が異なる特徴をもつ。それは例えば、ローマの合理主義者が伝統主義者と協同しつつ運動を展開する一方、ミラノの合理主義者は中央政府のあるローマとの距離の故に、グループ7のメンバーが前衛的な活動を続け、近代建築が論争の主題となったことに示される。このような運動の特徴から、建築と他分野の間における人物の活動及び合理主義との関係を明らかにし、また、各都市の合理主義の運動を具体的に明らかにすることは、イタリア合理主義の建築思潮を理解するために重要であると考えられる。

イタリア合理主義建築は、1950年のB.ゼーヴィの『近代建築史』以降、多くの研究者によって様々な観点からの論文が発表される。日本においては、1970年代後半からイタリア合理主義建築が紹介され、83年以降、鵜沢隆による一連の研究論文が発表される。イタリア合理主義を取りあげたこれまでの各国の研究では、建築家或いは建築作品を主題としたものが多い。また、イタリア合理主義を主題とした論文に関して、初期合理主義研究においては、MIARの活動経緯が明確でないものが多く、建築とファシズム、或いは芸術等との関係を論じた研究においては、手紙、書簡等の一次史料に基づいて検討されたものは僅かである。

また特に日本における既往研究では、バルディやペルシコ等、建築と他分野の間における人物の活動、及び合理主義者との関係を主題に、一次史料に基づいてこの運動の思潮を検討したものは見られない。

このような背景から、本論文では、イタリア合理主義建築研究の一部として、一次史料及び既往研究の読解を通して、1920年代の初期イタリア合理主義、及び30年代においても前衛的な活動を進めたイタリア北部の合理主義に関して、その活動の経緯を明らかにし、さらに、バルディ及びペルシコの、建築と他分野の間における活動の経緯及び合理主義者との関係を明らかにし、この運動の建築思潮を考察することで、イタリア近代建築史におけるイタリア合理主義建築の位置付けを目的とする。本論文の特色は、イタリア合理主義に関して、多くの一次史料を読解することで、その活動の経緯を明らかにすることにある。また、本論文では、この時代のイタリア建築に特徴的な、ファシズム、或いは当時の芸術、文化運動等との関係に着目し、建築とそれらの分野の間における人物の活動、合理主義者との関係を明らかにすることによってイタリア合理主義の建築思潮を捉えるという、イタリア合理主義建築研究における新たな視点を提示した。

本論文は序論2章、本論は序章1章を含めた5章、結論から構成される。

序論第1章では上に述べたような本論文の背景と目的を述べ、続いて本論文の構成を示す。第2章では、まず、イタリア合理主義建築に関する既往研究について概説し、次に、本論文に関連する、二回に亘るイタリア合理主義建築展とMIARの活動に関する既往研究、さらに、MIAR解散以降の、1930年代のイタリア北部の合理主義、バルディ及びペルシコに関する既往研究をそれぞれ纏めた。

本論序章である第3章では、イタリア合理主義建築研究における本論各章の位置付けを明らかにした。

第4章では、初期イタリア合理主義の主要な活動である二回に亘るイタリア合理主義建築展とMIARの活動について、その経緯を明らかにし、その特性と意義を纏めた。第一回合理主義建築展は、合理主義建築家が国家規模で開催した最初の展覧会として位置付けられ、建築への国家の介入が意図された第二回合理主義展ではムッソリーニの訪問が実現されるが、合理主義に対する保守派の反感を招く原因となり、両者の激しい対立が生じたことを明らかにした。また、第一回の展覧会後に結成されたMIARは国家に承認された組織として合理主義運動を展開させただけでなく、CIAMのイタリア支部としての役割も果たしたこと、また、MIAR解散後も合理主義者は論争という手段で運動を展開させたことを確認した。

第5章では、MIAR解散後のイタリア北部の合理主義について、この時代のイタリアの近代建築運動の特徴として挙げられる、展覧会、設計競技、建築誌にお

けるそれぞれの活動の経緯を明らかにした。そして、イタリア北部の合理主義は、首都ローマへの進出に成功したと言いが、トリエンナーレ等の展覧会或いは建築誌においてその運動を展開したこと、特に建築誌活動に関しては、バルディ、ペルシコといった編集者、著述家も合理主義者と協同し、また彼等に影響を与えたことが、この運動の特徴となることを示した。

第6章は、バルディに関して、第二回イタリア合理主義展以降の、彼のイタリア合理主義建築に影響を与えた活動を明らかにするために、建築誌<クアドランテ>(Quadrante)における彼の活動及び、ル・コルビュジェとの関係の経緯を明らかにし、さらに、イタリア合理主義建築に対する彼の見解について検討した。そして、バルディはその運動に関する具体的な思想はもたなかったが、MIAR 解散後の論文で、合理主義が後に成功することを予言し、<クアドランテ>創刊に際しては、この建築運動とファシズムの関係を主張したことを明らかにした。またCIAM 会議後には、イタリア合理主義者が信奉するル・コルビュジェの、<地中海性>という言葉を用いた主張を利用して、彼とファシズムを関連づけたこと、さらに、彼のイタリア講演に協力したことを明らかにした。そして、以上の検討より、バルディはイタリア合理主義において、その運動を促進し、合理主義者に影響を与えた人物として評価されることを確認した。

第7章では、ペルシコが携わった様々な活動を辿ることから彼の建築批評の背景となる思想を捉えた後、彼の近代建築に関する論文の読解を通して、彼のイタリア合理主義に対する評価を検討したが、その評価は以下に纏められる。イタリア合理主義運動は、本質的な必要性から生じたのではないため、その概念についての厳格な理論の検討がなされていない。初期の<合理主義>は、イタリア建築を欧州の近代運動と関連させることを試みるが、その欧州主義は、建築論争の展開に伴い、国家を意識したスローガンに変わり、特に<地中海性>という言葉は、この運動を正当化させるために多義的に用いられる。バルディは、第二回合理主義建築展で国家の建築への介入を要請したが、そのことで合理主義運動は、理性に基づくという<合理主義>の本来の意味を否定することになる。本章ではさらに、ペルシコの建築批評は彼の様々な活動による思想が反映されていること、また、彼は建築誌<カーザベッラ>(Casabella)の監修という、イタリア合理主義に近い立場でこの運動との距離を保ち続けたことを示し、以上の検討より、彼の建築批評はイタリア合理主義運動の思潮を理解する上で重要であると考察した。

結論では、本論文のまとめとして、各章の考察結果を要約した。